

サミットを超えてー洞爺湖から白馬へ (洞爺湖サミット・シェルパ報告より)

いちかわ しゅう
市川 周

社団法人世界経済研究協会
専務理事



私ども世界経済研究協会（会長：槍田松瑩三井物産社長）は、「産官学一体となって世界経済の中の日本の針路を考える」という活動理念の下、1960年代前半に社団法人として出発した。産においては商社をはじめ日本経済をリードする有力企業群を法人会員として擁し、官においては共管5省庁（外務省、財務省、経済産業省、農林水産省、内閣府）との多層的なネットワークを維持するとともに、学においては日本国際経済学会および国際ビジネス研究学会の二大会と、長年にわたり姉妹組織的交流を重ねている。

当協会活動の背骨となっているのが創刊50年余に及ぶ月刊誌「世界経済評論」の発行と、同誌にリンクする形で展開されている講演・シンポジウム企画「世界経済評論フォーラム」である。同フォーラムではサミットに出席する首相の個人代表である通称シェルパの報告会を78年の第4回サミット以来、毎回、サミット閉幕直後に開催してきた。「世界経済評論」誌には歴代シェルパの講演録が30年余にわたって掲載されている。

北海道洞爺湖サミットのシェルパは、2007年のハイリゲンダム・サミット（ドイツ）に続き、河野雅治外務審議官であった。去る7月16日に開催された報告会における河野氏の真情あふれる発言はほとんどノーカットで「世界経済

評論」9月号に掲載している。本欄では河野報告のエッセンスを、当日司会をさせていただいた私の感想と重ねて紹介する。

（シェルパという生態）

「それぞれの国のシェルパはなかなか強敵だ。徹底的に国益を追求し、おそらく今振り返ると120%、首脳の意向を代弁していた。ちょっとやそっとでは譲らない。日本人は食事をしながらお酒を飲んで腹を割って話をすれば、最後は肩を抱いて親しくなると思いがちだが、各国のシェルパは食事を与えて酒を飲ますともっと元気になり、ますます国益を主張し、ますます感情的になる」。

一河野氏という外交官は容姿はひょうひょうとした感じだが、日本外交の修羅場のようなものをさりげなく開陳してくれる方のような気がする。外交は基本的には政治家が責任を持つものだろうが、その裏方を担う官僚の歯ざりするような使命感、^{きょうじ}矜持といったものが伝わってきた。

（最後のキーワード）

「気候変動問題に関する共同宣言文は『2050年に50%削減を世界全体で共有し、コンシダー・アンド・アダプトをシーク（seek）する』となったが、シークというキーワードをシェル

パタチが見つけたし、合意したのはサミット2日目、宣言採択が行われた7月8日の未明であった。シェルパの仕事6ヵ月間の最後の瞬間であった」。

—外交、いや政治は言葉であるということを見せつけるようなエピソードだと思う。一部マスコミには、「何も決められなかったサミット」と批判する向きもあるが、河野氏にすれば後述するようなアジェンダセッティングのかなめとなるキーワードこそ「シーク」であったのだろう。

(G8はやはり大事)

「フランスのサルコジ大統領が急先ぼうになってG8は20世紀型グループだ。中国やインドの入っていないところで何を決めても意味がない。サミットはG13とかG14に拡大すべきだと主張する議論が出たが、G8という限られたメンバーでやるインターアクティブでアジェンダセッティング（世界の大きな流れ、道筋を決めていく）な議論は大事である」。

—75年、第1回目のサミットがフランス・ランブイエで開催された時はG6（米国、フランス、英国、ドイツ、イタリア、日本）で、ロシアはもちろん、カナダも入っていなかった。戦後日本外交が^{きょうこう}倥傯にも近い形でつかんだサミットのメンバーシップを、そう簡単には手放したくないという思いが河野氏というか日本外務省にはある。しかし、世界の流れが脱G8であるとしたら、日本外交にはそれを見込んだ新戦略が問われている。

(議長国日本の役割)

「2007年のように欧州の一国が議論をリードすると、サミットの議論がどうしても非欧州との対立の色が強くなってきて、先鋭的なものになる。今回のように日本が議長をやると、それぞれの立場を踏まえて何とか議論を収れんさせようと図る。こういう議事運営はひょっとしたらG8の中でも日本にしかできないのではないかと思う」。

—この指摘はとっても新鮮であった。今までの

シェルパ報告にはない日本の役割意識の明確な主張である。日本は別に「アジアの代表」として参加

しているわけではない。もし、それにこだわるなら「中国に席を譲る」というやぶ蛇になってしまう。かつて新渡戸稲造や重光葵といった日本外交の先達が求めた「東洋と西洋の架け橋」という役割意識にも近い感覚を、曲り角にきたサミットのシェルパとして2年間見つめてきた河野氏が抱いているのは、大変印象的である。

(洞爺湖から白馬へ)

ところで、次に日本が議長国になるのはG8なら8年後、G13なら13年後となる。そろそろ輪番で会議主催国になることから脱皮し、スイスのダボス会議のごとく毎年、日本でアジェンダセッティング型の国際会議を開催することをめざしたらどうだろう。それこそ、河野氏が指摘される日本型議長機能をフルに発揮し得る舞台であり、脱G8に向けた日本外交の戦略的布石になるのではないだろうか。

ダボス会議は世界各地で地域会議を展開しており、2年前の6月、東京で東アジア会議を開催したが、1回だけの単発で終わった。めざすのは、日本人がいつまでもダボス会議のお客さまであり続けるのではなく、ダボス会議のようなものを日本人の手で継続的に主催し、将来はアジアから、世界から、人々の知を引き込むことである。そのような試みの第一歩を私ども世界経済研究協会は来る11月15～16日、日本アルプスのふもと長野県白馬村で開催する。その名も「白馬会議」である。ご参加をお待ちしている。

なお、「白馬会議」でネット検索するとPDFの案内チラシが出る。問い合わせ先：(社)世界経済研究協会 Tel. 03-6423-0057



河野審議官